

～郷土かるたで故郷発見～

野国洲羽の海に逃れて来て、「この葦原の中津国を天神の御子の命のとおり献上しましょう。そしてこの地から他所には行きません。」と誓約した。諏訪の神氏族には建御名方命の鎮座について別な神話があって、それによれば「諏訪大明神がこの地に來られたときに、身につけられた真澄の鏡、八栄の鈴、並に唐鞍・轡などがあって、御鏡は数百歳の間陰曇りがなく、鈴はその音がかわることがなく、毎年大祝が鏡に向って、その鈴を振って天下泰年の祈願をされた」とある。すなわち、諏訪大明神は神宝を持って天下りした神であった。このすぐれた文化を持った神氏族は先住民族を同化して、勢力は強まり、その氏族制度は次第に確立していった。



力した。諏訪地方では早くから新田の開発が行われたが、それが農民の生きてゆく大切な手段であった。坂本養川は二十三歳で江戸に出、水利を細かに調査したやがて諏訪に帰って、八ヶ岳山麓の開発に心を配った。養川の開発計画は、蓼科・八ヶ岳の水を山麓一帯に引いて、開田約八千石、湖辺を干拓することによって三千石、その他の水利を計ることによって、合わせて一万二千石の増収をねらったものであった。この計画は諏訪藩家老によって採用されたが、実施に移されたのは天明六年（一七八六）からで、山浦一帯に開いた水路は十数条、開田三百五十町歩に及んでいた。



国譲り本拠を諏訪に建御名方命

古事記によると、天照大神は皇孫瓊々杵命を豊葦原中津国の主にしようとして、まず経津主・建御雷の二神を使として出雲の国に降して、大国主命に交渉させた。しかし大国主命の第二子建御名方命は賛成しなかった。そしてこの使の二神と力競べをしたが敗れて科

諏訪のいろはかるた (終)
全国各地に存在する郷土かるた。多くは絶版となり現在では入手が困難です。ふるさとの財産「諏訪いろはかるた(信濃文化研究会作成)」に詠われたかるたを紹介いたします。



農業の水利は岳麓養川堰

農は国の本といわれる。農民がおさめる年貢によって藩の財政が維持されたということである。また賦役を課して、土木工事が行われたがそれにもかかわらず、農民のためになるものは少なかった。農民は苦しい生活を打開するために、農業に励んで農地の開きに努



万治の石仏で四季を楽しみ、よるすおさめませんか。



赤砂浜から見る夕日



諏訪湖全面結氷



3月の暦
伏見屋郎
山口誠夫作

全国大会個人グランプリ / 下諏訪の恵み あっちゃん漬け

漬物日本一を決める「T-1グランプリ」が1月15日、東京タワーの特設会場で開かれ、下諏訪町東弥生町の松澤アツ子さんの『下諏訪の恵み あっちゃん漬け』がグランプリに輝きました。あっちゃん漬けは縹瓜の中に青じそで包んだ人参・生姜・みょうがを入れ酒粕で漬け、切ったときの色合いが美しいピリ辛味の漬物です。今後、商品化され町の活性化なることを期待します！



今月のおすすめ本

はるかぜ とふう 福音館書店 小野 かおる/作・絵



春風の子、とふうは仲間達と動物園に行き、色んな動物の周りで大はしゃぎ。

でも、他の春風の子達とけんかをしてしまい、動物園は砂ぼこりにつむじ風に大騒ぎ。

家に帰ると、お母さんはとふうを一目見てけんかをしたことがわかってしまいました。どうしてお母さんはわかったのかな？ちょっと騒がしいけれど、うきうきした気持ちになる春を感じられる楽しい本です。どこか騒がしくて、楽しげな春風が吹いたら、とふう達かもしれせん。(加藤 みどり)

大人の流儀

講談社 伊集院 静/著



「本物の大人」になるために、どう考え、どう振る舞うのか。

大人が人を叱るときー(あなたの言葉でダメなものはダメだと。)何もしたいことがないときー(旅をしなさい。)

仕事の基本とはー(丁寧さが基本。人間の誠実さが丁寧を生む。誠実は生きる姿勢である。)大切な人を失ってー(妻、夏目雅子を亡くしている。)とてつもない悲しみに包まれたときー(人は事情をかえながら生きていく。救ってくれたのは肉親であり、恩師であり、友人である。酒は友となる。時間が解決してくれる。)大人に仲間入りするためにー(すぐに役に立つものはすぐに役立たなくなる。世界を見ろ。金で手に入るものなどはたかが知れている。)などなど。

新たな一歩を踏み出すこの時期に、多くの人に読んでほしいと送る一冊。(中村 政博)

～町図書館から～